

Zombies 좀비들

© 2010 by Kim Jung-hyuk

All rights reserved.

First published in Korea by Changbi Publishers, Inc.

This Japanese language edition is published by arrangement with
KL management, Seoul, Korea

This book is published under the support of Literature Translation Institute of
Korea (LTI Korea).

目次

ゾンビたち

5

作家の言葉

377

訳者あとがき

379

この世のすべてのゾンビたちへ

* zombi(e) [zámbi, zómbi] n. (pl. ~s)

- 1 死んだ人間を生き返らせる超自然的な力（西インド諸島の原住民の迷信）；魔法によって生き返った死体
- 2 （意志を持たず、行動が機械的な）無気力な人、のろま、馬鹿
- 3 （口語）奇人、変人
- 4 ゾンビ（ラム酒に柑橘類のジュースなどを加えたカクテル）
- 5 西アフリカ原住民のあがめる蛇神

ゾンビたち

ゾンビに初めて遭遇したのは、電波チェックの仕事をしていたときのことだった。僕は、電波の受信度度が表示される液晶画面と顔を突き合わせながら全国を駆け回っていた。都市の名前や有名な建築物、人々の生活などは、僕にとって何の意味も持たなかった。関心事は電波の受信度度だけ。僕が目と心を動かせるものは、ほかに何もなかった。その春、僕の人生は、深さでいったら地下五階ぐらいの完璧などん底を這っていた。業界の専門用語でいうところの「無電波のブラックホール」をライトも持たずに進んでいるところだったとでも言おうか。周囲は闇に閉ざされ、意味のあるものなど何一つとしてなかった。

僕は、自動車のフロントガラスに取り付けられた液晶画面にぼんやり目をやりながら、一日に十二時間、車を走らせた。アクセルを踏み、ブレーキを踏み、受信度度ウインドウをチェック。再びアクセルを踏み、ブレーキを踏み……。こうしているうちに一日が終わる。仕事を終えて車から降りる頃には膝ががちがちに強張って、梃子でも持ち出して無理やり伸ばさないと戻りたくないんじゃないかと思えるほどだった。そのうち脚が折れてしまうんじゃないかと不安になったりもしたが、幸いにしてそれはなかった。膝の骨が砕けて、膝から下がすとんと落ちてしまおうとか……。それでも砕けた瞬間のその音だけは、スカツとするような音なんじゃないか。時速百五十キロぐらいの直球を

正確にミート、レフト側の塀を軽々と越えて場外までぐんぐん伸びてゆく大ホームラン。かっきーん。そのジャストミートの音とそっくりなんじゃないだろうか。そんなことを思ったりもした。

仕事は簡単なものだった。車であちこち走り回り、携帯電話の受信感度をチェックするだけだった。受信感度はゼロから十まで。ゼロは電波がまったく届いていない状態、十は最高レベルだ。感度が四以下に下がると地図に印を付ける。問題解決は僕の仕事ではなかった。僕はただ、液晶に目を凝らし、その数値を記録すればよかった。受信感度ウィンドウに浮かぶ数字だけが、僕の友だちだった。四、二、三、九、一、四、二、四、五、七、八、六……。こんな連中と一日じゅう顔を突き合わせていると、そこに何やらないような意味があるような気がしてくる。世の中のことはすべて一と十の間にあるような。車の状態は七で体力は四、僕の生活は一、自信のほどといえばゼロ。気分は一から四の間を行ったり来たりしていた。身のまわりのことを何でも数字に換算して考える癖がつくと、僕はますます無気力になっていった。数字というのは自分で変えられるものではなく与えられるものだという気がして、一が二になるのを馬鹿みたいに手をこまねいて、ただただ待っていた。でも、数字はなかなか変わらなかった。生活は一からピクリとも動かず、体力は四から三に落ち、気分はたいいて二以下だった。これ以上落ち込みようのない完璧などん底だと思っていた。時としてマイナスになることも、ゼロが必ずしもどん底とは限らないということも、そのときの僕はまだ知らなかったのだ。

その頃の僕を苦しめていたのは、なんとといっても兄の死だった。人の一生とは、十からスタートして八、六、三と進み、だんだんゼロに近づいていくものだと僕は思っていた。けれど人間の死というもの、そんなに情け深いものではなかった。ミサイル発射のカウントダウンよろしく、十秒前……ファイブ、フォー、スリー、ツー、ワン、そして消滅……と順番どおりに進むものじゃなかった。人

生のちよど七あたりには兄は、そこから一気にゼロへとダイビングしてしまった。四、三、二、一をすつ飛ばして、いきなりゼロになってしまったのだ。兄の身に起きた、そんな「省略」を受け入れるのは辛いことだった。僕の人生だって、あるとき突然省略されてしまうかも、と考え付いたとたん、すべてが虚しく感じられた。

兄の遺品といえるものは、ほとんどなかった。四十二歳のその歳までいっただい何をしていたのかと言いたくなるほど、何一つ遺っていないかった。妻子もなく、家もなく、車もない。コンピュータのフォルダの中にもこれといったものはなかった。音楽ファイルと写真がいくつか。それが全部だった。フォルダを見ている限り、兄は自分の死を予感していたのでは、と思えて仕方がなかった。兄が遺した品は、結局一万二千枚のLPだけだった。兄が数十年かけて集めたものだ。兄が幾度となく手に取ったはずのレコードたち。僕はそれを持っていったかったが、置き場所がなかった。一万二千枚どころか、千二百枚でもとても無理だった。僕は、LPをぜんぶ音楽博物館に寄贈することにした。

「レコードコレクターにとって、最高に不名誉な瞬間がある。いつだと思う？ それはな、二度買いしちまったときさ。もう持つてるのに、すっかり忘れてもう一度買ったたりする奴。コレクター失格だな」

兄はいつか、そんなことを言っていた。僕はうなずくことができなかった。一万二千枚ものレコードを集める間、一度もミスを犯さないなんて、そんなの不可能だ。頭の中に所有レコードのリストがそっくり入ってでもない限り、二度買いしてしまうのも無理はない。そもそも一万二千という数字じたいが僕にとってあまりに桁外れで、実感も湧かなかったが。

兄が死んだ後、博物館に寄贈するためLPを整理していたときのこと。僕は兄の秘密を見つけてし

まった。LPが五十枚、レコードラックの片隅にきっちりと並べられていた。二度買いしてしまったものだった。兄は、自分の不名誉な瞬間を何か所に集めておいたのだ。兄はそれを見ながら何を思ったのだろう。自分の記憶力の無さに、不甲斐ない思いを噛みしめていたのだろうか。もう二度とこんな失敗はするまいと心に誓ったろうか。その五十枚は、僕が持っていることにした。兄の不名誉な瞬間まで音楽博物館に寄贈することはないだろうと思っただけだった。

その頃僕は、日々の生活の百パーセントを車の中で送っていた。会社から貸し出された業務用バンの後部座席とラゲッジスペースに持ち物のいっさい合財を積み込んで、そこで暮らしていた。持ち物といったところで、洋服の入ったダンボールが二つとガラクタを詰め込んだボックスが三つあるだけだった。五十枚のLPを車に積み込むと、とにかく物持ちになったみたいな気がした。後部座席はますます狭くなり、箱を一つ助手席に置かなければならなかった。聴けもしないLPを車に積んで走るとバカバカしい気もした。でも、ほかにこれといった手立てもなかった。LP五十枚分のスペース。せめてこれぐらいは、兄との思い出のために取っておきたかった。

車のトランク用のレコードプレーヤー……。食事には立ち寄った定食屋のテレビでコマーシャルを見るとき、にわかには信じられなかった。「愛車の中でビンテージライフをデザイン！」というコピーもどことなく胡散臭かったし、レコード針が飛ぶことはないと言い切るショッピングナビゲーターの言葉もどうにも嘘くさかった。でも僕は翌日、代理店に駆けつけた。一時間のテスト走行の結果、そのコマーシャルが決して誇大広告ではないということがわかった。でこぼこの砂利道の上でも針は飛ばなかった。

「衝撃緩和の新たな時代の幕を開けた製品。そう言わせていただきたいですね。大げさに言ってるん

じゃありませんよ、事実です。衝撃が加わった瞬間、トランクの中の全システムが衝撃を完璧に吸収してしまふんです。変な言い方かもしれませんが、衝撃を全身で包み込むんですよ。衝撃っていうのはですね、受ける側の気の持ち方次第でどうともなるものなんですよ。ほんのわずかな衝撃が大爆発を引き起こすこともあり得ますが、途轍もない衝撃が羽根みたいに軽くなる可能性もあるんです。私たちは新しい商品を作り出したのではなく、衝撃を受け入れる姿勢を開発したというわけなんです」

目と目の間が異様に狭いためか、眼鏡がやけに大きく見える販売スタッフがトランクを「ごんごんと叩きながら言った。

「この程度の衝撃なんか、空気とぶつかるみたいなもんですよ」とでも言いたげだった。あまり販売員らしからぬ話し方だった。相手に信頼を与えるタイプの顔立ちではなかったが、その話し方のせいで、かえって好感が持てた。衝撃を全身で包み込むのだという説明が、僕の心をつかんだ。「ハグシヨック (Hug Shock)」という製品名も気に入った。僕はバンのラゲッジスペースにハグシヨックを取り付け、トランク用のスピーカーと五十枚のLPが収納できるレコードラックも購入した。月給の三分の一が飛んでしまったが、兄が遺したレコードを聴きながら仕事ができるんだと思えば、惜しくはなかった。

ハグシヨックは僕の生活を一変させた。ラゲッジスペースで回るプレーヤーから流れ出る音楽を聴きながら仕事をしているうちに、気分がいくらか上向きになってきた。二以下に落ち込んでいたのが、五までアップしたこともあった。兄が好きだった音楽を聴いていると、心が安らいだ。最大の変化は、三十分ごとに嫌でも休まなければならないということだった。アルバムの続きを聴きたければ、車の

後ろに回ってレコードを裏返さないといけなかったからだ。初めは少し面倒くさかったが、慣れてくると意外とメリットが多かった。音楽が止んだら車を止める。そして五分間ストレッチをしてから、ラゲッジを開けてLPを裏返すか、他のLPを選ぶ。そしてまた車のエンジンをかける。車を止めたまま、周りの景色を眺めたりすることもあった。ハグシヨックに出会う前は考え付きもしなかったことだ。

レコードを聴き続けるうちに、兄の好みがなんとなくわかったような気がしてきた。同じLPを（本人が気づいていようがまいが）二度買いたということは、それだけそのアルバムが好きだったか、聴きたくて仕方なかったということだろう。つまり僕は、兄にとつての「ベスト50」を選んだというわけだ。レコードはみな六〇年代のものであった。一九六〇年代といったら、僕がまだ生まれてもいなかった頃だ。なのに、レコードを聴けば聴くほど、昔なじみの音楽のように感じられた。時間は前へ前へと進んでいるのに僕の心と体は後ずさりを続け、しまいには僕がまだ生まれてもいない時代にまで戻ってしまったかのような気がした。それでも心は安らかだった。

ハグシヨックは、僕の人生も変えた。兄がいなかったらLPはなかったはずだ。LPがなかったらハグシヨックはいらなかったはずだし、ハグシヨックがなかったらホン・ヘジョンに出会えなかっただろう。ホン・ヘジョンがいなかったら、彼女に会うこともなかった。僕の身に起こったことは全部、一つにつながっていた。人はどうかかわらないが、僕にとつて、人生というものは一本の線だ。一つの出来事は、それ以前の出来事の結果であると同時に次の出来事のきっかけになった。ドミノが次のドミノを倒していくように、すべてはつながっていた。初めのドミノが何だったのかはわからないし、一番初めが必ずしも重要だとは限らない。要は、僕が今ここに立っているということであり、今のこ

の出来事が、また別の出来事の原因になるだろうということだ。僕は今、数百人のゾンビの群れの中に立っている。血生臭いにおいと叫喚に満ちたこの場所に、立っている。僕の人生の次のドミノ。それはいったいどんなものなんだろう。

電波チェックの仕事をしていて、液晶画面にゼロという数字が浮かび上がるのを見たのは三回だけだ。ゼロが出ると、事は少々複雑になる。まず車から降りる。そして電波がまったくつかまらないエリアがどこからどこまでなのか正確に把握する。ポータブル受信機を手に、あちこち歩き回って電波をチェックするのだ。

この仕事に就いて一年経ったとき、初めてのゼロが出た。こんな所まで電波を送る必要があるのか？　と思ってしまうぐらい辺鄙な山あいだった。辺りには木々が押し合いへし合いするように立ち並んでいた。僕は空き地に車を停めた。

僕は車を降り、ラゲッジスペースで回っていたプレーヤーを止めた。そしてLPを注意深くケースに戻した。僕は決して神経が細やかなほうではない。けれど兄のLPを手にするときばかりは、ほとんど厳かなくらいに注意深くなる。兄のレコードをできるだけきれいにとっておきたかった。死ぬまで聴き続けられたらと思っていた。

どこからか、葉っぱのカサコンという音が聞こえた。初めは風かと思ったが、音はだんだん大きくなってきた。誰かが近づいてくる足音だった。

「手を挙げる、動いたら撃つ」

僕はトランクを閉めて、ホールドアップの姿勢をとった。二十歳になるならざる軍人が、僕に銃を向けていた。長さ三十センチにも満たない新型の小銃だった。僕は彼に笑顔を向けた。

「ここで何をしているんですか」

銃を構えているくせに、彼の声は震えていた。明らかにこんな状況は初めてのようだった。

「僕ですか？ 仕事なんですか」

「ここで何の仕事をしているんですか」

「エボル (EVOL) の電波チェックの仕事ですが。ご存知でしょうか？ 通信会社エボル……。この辺りの受信感度のチェックをしてたんです」

「何か身元が確認できるものをこちらに投げてください」

新米軍人で決まりだった。階級章はよく見えなかったが、身分証を投げろという言葉だけで充分だった。ふところに入れた時間を相手に与えるのは自殺行為なのだ。僕が銃を持っていて、彼を殺すつもりだったなら、彼の命はなかったろう。僕は、ズボンの尻ポケットに入っていた財布を彼の足元に放った。彼は腰をかがめ、左手で財布を拾った。右手で銃を構え、左手で財布の中を探る姿は滑稽だった。財布がなかなか開かないようで、軍人はすっかりそちらに気を取られ、銃のほうはお留守になってしまっていた。僕に向けられていた銃口はだんだん下がってゆき、今や彼の足の甲を狙っている。

「財布、こっちに投げてください。身分証出して、投げ返しますから」

彼と僕は、五メートルほど離れて立っていた。彼は僕の言うことには耳を貸さず、左手だけで財布を探り続けた。さんざん時間をかけてようやく身分証を確認した彼は、下を向いてしまっていた銃口

を再び僕に向けた。

「受信感度のチェックなんて話は聞いていませんよ。ここは、民間人は立ち入り禁止なんです。知らなかったんですか？」

「電波を追っかけて動いてますから、表示板なんかよく見てないんですよ。知りませんでした。こっちのほうに電波が全然きてなかったんで、調べに来たんです」

「携帯はよくつながってますよ」

「僕がチェックしてるのは、普通の携帯電話の感度じゃないんです。ELTEって言って、次世代通信規格なんです、聞いたことがあります？」

「いいえ」

「ともかく、そういうのがあるんです。次はちゃんと立ち入り許可もらって来ますよ。銃、下ろしてもらえませんか？」

銃という言葉聞いたとたん、彼はびくつきとした。自分が銃を持っているということを失念していたかのように。彼は、再び僕に銃口を向けた。

「早くここから出てください」

「一つだけいいですか？ この近くにどこか、人の住んでるところありませんか？ ちょっと腹が減ってます」

「この道を下ると、左手に案内板が出ているはずですよ。そこで左折すると、コリオといって、小さい村があります。五分もあれば行けるでしょう」

コリオという名前は、僕が適当に考えたものだ。本当の名前を記したいが、それはできない。僕が

その村の実名を明かすことは、失礼極まりない行為のように思えるからだ。その村については新聞にも載ったことがあるから、実名を知っている人もたくさんいるだろう。でも僕はその村のことを、コリオという名でのみ心にとどめておきたい。

僕は車に乗り込み、カーナビゲーションに付いているカメラで写真を何枚か撮った。会社に報告するのに必要だったのだ。カーナビには、この地域に関する情報はいっさい登録されていなかった。軍人が言っていたコリオという村を検索してみたが、これも見つからなかった。僕は車をＵターンさせて道を下りはじめた。サイドミラーに軍人の姿が映った。彼は、こちらに向かって銃を構える姿勢を崩していなかった。軍人の姿はどことなく妙だった。部隊のマークもなかったし、階級章も付けていなかった。それに怯えきっていた。人間というものを見るのは生まれてこのかた初めてだともいうように。

軍人の言った通り、コリオは車で五分のところにあった。小さな村だったが、中心部には大きな店もあり、車も多かった。これぐらいの大きさの村がカーナビに登録されていないというのもおかしいことだ。僕は車をゆっくりと走らせ、何か食べられる所を探した。古色蒼然としたファーストフード店が目についた。本場に「ファースト」フードが出てくるのか疑わしくなるような佇まいだ。あんまり空腹だったせいとか、僕はコリオに足を踏み入れてから電波のチェックを一度もしていなかった。

ハンバーガーとコーラで腹ごしらえをし、再び車に乗り込んだときになって、その村の受信感度がゼロだということによく気づいた。考えられないことだ。人口百人以上のエリアについては、すでに作業は完了している。感度がゼロということなどあり得ないのだ。僕の仕事は人があまりいない辺鄙なエリアの感度をチェックすることで、人の多い村は実は担当外だったが、時間をかけて村の中

をあちこち回ってみた。どこもゼロだった。電波がまったく感知できない。村から出て国道に入ると、とたんに電波がつかまり始めた。僕は、その地点の緯度と経度をチェックし、会社に戻った。

「そこは除外エリアだよ。知らなかったの？」

コリオ村の話をすると、作業チーム長は詰るような口調で言った。僕は何も聞いていなかった。

「いえ、初耳ですけど……」

「イ・ギヨンム君には会ったの？」

「この間、ちらつと会うことは会ったんですけど、引き継ぎはまた今度するからってことでした」

「あいつはまったく、最後まで……」

僕の前任者はイ・ギヨンムという名の四十五になる男だったが、引き継ぎの最中に急用ができたと言つて姿を消したまま、何の音沙汰もなかった。彼は不安そうで、何かに追われているかのようにだった。イ・ギヨンムに初めて会った瞬間、僕の頭に子どもの頃と同級生の姿が浮かんだ。そいつはクラスで一番勉強ができたが、おそろしく表情の変化に乏しい奴だった。死ぬまでに五種類くらいの表情しか浮かべないんじゃないだろうか、と思えるほどだった。名前は思い出せないが、顔だけは今もありありと思ひ浮かぶ。唇が薄くて顎は尖っており、額が狭かった。奴とは特にこれといったいきさつがあったわけではないが、教室や廊下ですれ違うたび、何か悪さをしでかして見つかったときのように胸がどきんとしたものだ。唇の一方の端をきゅっと吊り上げた表情、時折浮かべるその表情一つで相手に屈辱感を味わわせる、そんな傲岸不遜な顔付きだった。年齢からいってもイ・ギヨンムがそいつであるわけではないが、彼の顔を見るたびにそのかつての同級生が思い出され、なんとなく嫌な気分になった。

「じゃ、無通信エリアのことも聞いてないのかな？」

「ええ、それも初耳ですが……」

「チエ君、前の作業区域ってどこだっけ？」

「F三十二区域です」

「ああ、そうだっけね。こっちのほうは山岳エリアだから、事情がかなり変わってくるんだ。こっち、赤い印が付いてるところあるだろ？」

チーム長は、ノートパソコンの画面に僕の受け持ち区域の地図を呼び出した。そこには三つの赤マルが付いていた。一つはかなり大きめで、あとの二つは小さい。位置からいって、大きなマルがコロオ村のようだ。

チーム長は二十分以上かけて、時折愚痴を交えながら無通信エリアについて説明してくれた。僕はじっと座って話を聞いていた。整理すると、だいたいこんな話だった。

まず、コロオ村は無通信エリアのうちの一つだ。次に、無通信エリアとは、外部の通信システムを利用せずに独自開発のシステムを使っている地域で、そのため電波チェックはできない。つまり、無通信エリアはすべて除外エリアだ。チーム長はその決して長いとは言えない話をする間に、イ・ギョナムの望ましからぬ勤務態度に十回ほど言及し、政府の通信関連政策はいつたいうようになってるのか、という話と地方自治制度が通信技術の発達を阻んでいるという話を何度も繰り返し返した。

僕は、無通信エリアという言葉を初めて耳にしたときの感じを今も覚えている。僕の頭に浮かんだ無通信エリアとは、完全な真つ暗闇だった。電波はいっさい届かず、通信手段も皆無。誰かと話をしたければ、長い道のりをてくてくて歩いて相手の元へ行き、じかに話をするしかない、そんな暗黒の空

間が思い浮かんだ。すると、奇妙なことに心が安らいだ。もしもそんな場所があるのなら、そこに隠れていたかった。外界から完全に切り離された空間にずっとどまりたかった。受信感度ゼロのエリアで、兄のLPを聴きながら静かに老いていきたいと思った。コリオ村はそんな場所ではなかったけれど。

無通信エリアの説明を聞いてから一週間たった頃、イ・ギヨンムから電話がかかってきた。引き継ぎをしようということだった。必要なことはだいたいチーム長から聞いていたので、今さら引き継ぎは必要なさそうに思われたが、僕らはコリオ村のはずれのほうにある松林公園で会うことにした。僕が松林公園に着いたとき、イ・ギヨンムはもう来ていた。駐車場に会社のバンがとめられている。バンから降りてきたイ・ギヨンムは、腕時計を見た。

「遅刻ですね」

「時間ぴったりでですけど」

「僕の時計が進んでるのかな。三分過ぎだ」

「そうですね、三分遅刻ですね」

「引き継ぎ、ちゃんとできなくてすみませんでしたね。ちょっと事情がありました」

「そうみたいです」

「嫌みですか？」

「とんでもない。三分遅れただけなのに待ちくたびてらしたみたいなんで、そういうこともあるかな、と」

「ほら、嫌みじゃないですか」

「そんなつもりで言ったんじゃないんですけど。そう聞こえたんならお詫びします」

「もういいです」

「会社、まだ辞められたわけじゃないみたいですね」

「え、何ですって？」

「あ、いえ、会社のバンに乗ってらっしゃるから」

「あれはもう返すんです。返しますよ。また言いがかりですか？」

「そんなんじゃないですよ」

「さあ、さっさと済ませちゃいましょう。はい、これはファイル、あと、検索関連の重要事項をまとめてCD-ROMに焼いておきましたから、ご参考に。ほかに何か聞いておきたいことは？」

「これも失礼になるかもしれませんが、会社はまだどうして辞めるんですか？」

「なんだってそんなこと訊くんですか？」

「後釜としては、前任者の退職理由を知っておくべきかな、と。言いたくなかったらかまいませんけど」

「電波チェックの仕事、始めてどれくらいになりますか？」

「一年です」

「まだ駆け出しですね。この仕事、十年ぐらいやってるとね、そりやもういろんなものをチェックすることになるんですよ。電波はもちろんのこと、人も選別できるようになる。その頃になれば、僕がなぜ辞めるのか、君にもその理由がわかるでしょうよ」

イ・ギョムは僕と目を合わそうとはせず、バンの中ばかり見ていた。もはや話すことはなかった。

会話が途切れ、沈黙が落ちた。

「なかなかいい車ですね。新型のバンですか？」

「ええ」

「カーナビのバージョンは？」

「三・五ですけど」

「ちよつと見ても？」

「もちろん」

イ・ギヨンムはいそいそとバンに乗り込んだ。カーナビの電源を入れ、メニューをあれこれチェックする。ひどく手馴れていた。同じ機械を長いこと操作してきた者の手つきだ。

「このスピーカーは？」

イ・ギヨンムがカーナビの横に付いているスピーカーを指差した。

「ああ、それはハグシヨックについて、車の中でLPを聴くためのものなんです。ラゲッジスペースに取り付けてあるんですけど、ご覧になります？」

「いえ、結構です。音楽には別に興味ありませんから」

話をしているうちに、いつしか僕らの位置はあべこべになり、イ・ギヨンムが運転席に、僕が助手席に座っていた。イ・ギヨンムはしきりとハンドルをいじったり、シートの位置を変えてみたりした。新しいおもちゃを買ってもらった友だちをうらやましがると子どものような顔つきだった。新型バンに乗って野や山を駆け巡り、電波をチェックする僕を心から羨んでいるかのようにも見えた。

「これ、この電波表示、どんな気になりますか、これ見て？」

イ・ギヨンムがカーナビの電波表示を指して尋ねた。

「そうですね、自分がどこかとながってる感じ？ 電波がつかまらないと、なんか不安になるじゃないですか」

「チェ・ジフン君でしたよね。電波チェックしてる連中の職業病、知ってます？ 何かっていうとすぐ解析したがる。人は一生の間に数えきれないほどの電波をとらえますが、特に気に留めることなく受け流します。ほとんど気づきもせずね。解析なんていっさいしない。単なる現象として電波をとらえてるんです。でも電波チェック要員はダメです」

「いいことなんじゃないですか？」

「どうでしょうね。まあ、せいぜい頑張ってください」

イ・ギヨンムはハンドルを握ったまま、口をつぐんで正面を見据えた。そこは、コリオ村に続く道のとば口だった。僕は隣のシートからイ・ギヨンムを見つめた。イ・ギヨンムの目が一瞬きらりと光る。僕はその光の中に、パンを疾走させてコリオ村に突っ込んでゆくイ・ギヨンムの姿を見た。一線を越えかねない暴力の兆し……。荒唐無稽な想像ではあるが、彼の目の中には、そう呼べるものが確かに宿っていた。

イ・ギヨンムは慌ただしく去っていった。運転席から飛び降りたかと思ったら、僕にはろくすっぽ挨拶もせず、そのまま自分のバンに乗り込んで去っていった。僕は、つい今しがたまでイ・ギヨンムが座っていた運転席に移り、コリオ村へと向かう道に目をやった。のどかだった。平穩無事を絵に描いたようだ。そのとき、その道から軍用トラックとジープが出てくるのが見えた。

それからしばらくの間、コリオ村のことは忘れていた。何の変哲もない日常が繰り返された。LP

を聴き、電波のチェックをした。エボル社に入る前に勤めていた会社に退職金のことでも何度か足を運んだのを除いては、人と顔を合わせることもまったくなかった。日が昇れば電波チェックをし、日が沈めば車の中で眠った。朝まだ暗いうちに目覚めることや、目を開けたときに自分がどこにいるのかわからないといったことがしばしばあった。肩がしくしく痛み、朝起きると手首や肘が疼いた。友人たちとも連絡を取らなかつた。彼らに会うと、昔の話をすることになる。いいことであれ悪いことであれ、昔の話はしたくなかつた。昨日を消してしまわなければ、昨日以前に起こったすべてのことを深い土の中に埋めてしまわなければ、今日を生きたらぬような気がしていた。今日以外の日はすべて霧の中に沈んでおり、その中に何が潜んでいるのか、見極めたいとも思わなかつた。霧の中をへっドライトで照らしたくはなかつた。何が起こったのか、これから何が起こるのか、知りたくなかつた。

ときどきイ・ギョンムの言葉が思い出された。解析せず、電波をただ現象として受け止める。そんなことが果たして可能なのだろうか……。何も考えず、ただ一日一日を生きてゆきたい。それが僕の望みだつた。

コリオ村とは、思いがけない形で再会することになった。兄が遺した五十枚のLPのうち、僕がいちばん好きなアルバムは「ストーンフラワー」という六〇年代に活動していたプリティッシュユロックバンドのデビューアルバムだつた。そこに収録されている十曲は、あまり何度も聴いたもので、全部そらで歌えそうだつた。ストーンフラワーについても少し詳しく知りたくて、インターネットで検索してみたが、いくつかの基本的な情報以外、何もわからなかつた。四人グループだということ、二枚のアルバムを発表して解散したということ、グループのリーダーだつたイアン・デビスが自叙伝を出していることぐらいしか出ていない。検索していて、だいぶ前に絶版になっているイアン・デイ

ビスの自叙伝の翻訳版が図書館にあるという情報を得た。読書家でもなく、新しい情報にも興味のない僕だったが、ストーンフラワーに関してだけはなぜかこだわりが生まれた。その本の中に、僕のための新しい道が待っているような気がして仕方がなかった。僕は車で二時間かけてメトロの歴史図書館へ出向いた。

メトロの歴史図書館に一步足を踏み入れたとたん、僕はその場に漂う一種異様な空気を感じ取った。図書館に入ったことはあまりないが、図書館という所には、何ともいえない独特のにおいがある。紙のにおいのようなものもあり、カビの臭いのようなものもあり、正体不明の微生物の臭いのようなものもある、そんなにおいがどこか見えないところで蠢動しているのがわかる。事によると、図書館で働く人たちが発散するにおいなのかもしれない。図書館の椅子に座って本を読んでいると、空气中を漂っていた微生物がそうと頭の中に入り込んできて卵を産み付け、子を育てて、大きな固まりのようなものになっていく……。気色の悪い想像だ。でも、メトロの歴史図書館にはその特有のにおいがあった。どこもかしこもさっぱりと清められ、クリアな印象だった。完璧な消毒が施された空間、といった感じだった。メトロの歴史図書館といえば、四方がガラス張りになった清潔な空間が今も思い浮かぶ。実際の図書館の壁は、かっちり冷たいコンクリートだったのに。そこで知り合ったデブデブ130も、図書館とよく似たイメージだった。デブデブ130というあだ名は僕がつけたものではない。彼がその名乗ったのだ。

「こいついったい何キロあるのかなって、みんな思うんですよ。なのに訊けない。失礼だと思うから。そう思いながらも訊いてくる人もいますけどね、たまに。どっちがマシかって？ 訊いてくるほうですよ。僕も知りたいことは我慢できない質なまなんです。どうってことないですよ。世の中にはこんな人間

もいるってこと。お気になさらず、デブデブ1300って呼んでください。デブデブ取って、1300でもかまいませんよ。これ、不思議なんですけど、ある時期を境にね、僕、不動の百三十キロなんです。太りも痩せもしないんですよ」

デブデブ1300が言った通り、彼を初めて目にした瞬間、僕の頭に浮かんだのも、何キロあるんだろう、という好奇心に満ちた疑問だった。彼はいつも黒のスラックスに白いシャツを身につけていたのだが、彼の体に合う服がそうそうないからだ。その服装が、彼をいっそう異様に見せていた。歩いてゆく彼の姿を遠くから見ると、まるで巨大な「色の対照表」みたいだった。

黒と白のうち、大きく見えるのはどっちでしょう？ はい、答えはもちろん白ですよ。白は膨張して見えるし、黒は収縮して見えるんです……。

背中にそんな説明書きを貼り付けて歩いているかのようにだった。

「僕って、歩く巨大な二つの基石、って感じだと思いませんか？」

そんな冗談を言うぐらいにデブデブ1300は明るい性格だった。そうでなかったら、僕のような人間と親しくなることもなかっただろう。

デブデブ1300のものすごいところは体重だけではなかった。彼には驚くべき才能があったのだ。驚異的な記憶力。歴史図書館がなぜ彼を採用したのか納得できた。僕がイアン・デイビスの自叙伝について尋ねると、彼は即座に本の場所を教えてくれた。彼に教えられた棚を探してみると、ぴったりの位置に本があった。

「それにしても、どうしてそんな正確に知ってるんです？」

「体の脂肪に情報を蓄えてるんですよ。ウソだと思いませんか？ ホントなんです。太った人間にはね、

みんなそれなりの理由があるんですよ。人によって、食べ物や蓄えたり、愛を蓄えたり、罪の意識を蓄えたりしますけどね、僕は本の置き場所みたいな情報を蓄えてるんですよ」

「それじゃ太っちゃいますよね、だんだん。情報は増え続けるから」

「そんなことないですよ。ある時点であきらめますよ。ひたすらため込んでたら、破裂しちゃうじゃないですか。いらぬものは捨てて、必要なだけとっとくんですよ。新しい情報が入ってくれば、古い情報は消えます。だからって、昔の情報が全部消えちゃうわけじゃないですよ、役に立たないゴミだけね。不思議な体でしょ。うらやましいでしょ？」

デブデブ130と話していると、気持ち弾んだ。初めて会ったその日、彼は僕の心を一瞬にして武装解除させてしまったのだった。

「ここは初めてですよ。貸し出しカード、お作りしますね。ここはね、図書館としては小さめですけど、いい本がホントにたくさんあるんですよ。歴史について詳しく知りたければ、僕が作ったデブデブ年表をお薦めします」

彼のデブデブ年表を見たのは図書館に二回目立ち寄ったときだったが、その膨大さに鳥肌が立った。テレビを見たり本を読んだりして、何か具体的な日付が記された出来事が出てくると、彼は片っ端からファイルするのだ。一九八三年一月二十三日の項目には四百五十件、一九八五年二月十二日のところには六百件もの出来事が書き込まれていた。年表に目を通した後で、僕は彼に聞いてみた。「なんで一九八三年からなんです？ その前にも大事件はたくさんあったでしょうに」

「えへへ、実は僕が生まれた年なんです。その前のことには興味なし。僕がこの世にいなかったのに、知ったこっちゃないですよ。何年生まれですか？」

「一九七八年ですが」

「じゃ、一九七八年から一九八二年までってことで、お願いしますよ」

「何をです？」

「歴史をですよ、その間の」

「歴史にはあんまり興味ないんだけど……」

「あはは、冗談ですよ。僕みたいな自閉症患者じゃない限り、こんなもの作れませんよ。デブデブ年表は一九八三年からですけど、それ以前の歴史もよく知ってますから、何でも訊いてください」

デブデブ130によって僕の心が完全に解きほぐされたのは、彼の明朗快活な性格に負うところが大きかったが、同時に彼が僕と同類のような気がしたせいもあった。彼は明るく、僕は暗い性格だったけれど、初めて会ったときからなんとなく似たもの同士だと感じていた。僕がもしも電波チェックの仕事にやりがいを感じ、つらさを乗り越えられていたならば、デブデブ130みたいな人間になれたかもしれない。彼と僕は、まるで黒のスラックスと白シャツだった。彼は多少膨張気味の白シャツ、僕はきゅっと縮こまった黒のスラックス。でもどちらも同じ、体を覆っている服……。僕は歴史図書館に行く日が待ち遠しく、彼とのおしゃべりが楽しかった。歴史図書館に行くと、いつも僕は饒舌になった。人づきあいをいっさいせず、ただただLPを聴きながら仕事をしていた時期、デブデブ130は僕の唯一の友だった。

コリオ村の話が出たのは、デブデブ130とかなり親しくなった頃だった。イアン・デイビスの自叙伝『当代の黙殺』を読み終えた僕は、デブデブ130に薦められた本を何冊か読んでみた。同世代のミュージシャンの自叙伝や音楽関連のエッセイだ。読めば読むほどストーンフラワーというバンド

に引きつけられた。彼らは徹底的に軽んじられていた。でもそんなことなんかには鼻も引つ掛けていなかった。彼らは二枚のオリジナルアルバムと一枚の非公式ライブアルバムを出した後で突如解散しているが、その理由がまたふるっていた。

俺は、俺の音楽を完成させた。もはや生み出すものはない。この先アルバムを出そうと思ったら、俺たちの音楽をパクるほかはない。俺たちが作り上げた二枚のアルバムの収録曲は、まさに完全無欠の音楽だ。余計なところも足りないところもいっさいない。俺たちの音楽に欠点があると思う奴は、連絡してくれ。ぜひとも話を聞いてみたい。それが正しければ、俺はそいつを「音楽の神」と呼ぼう。もし間違っていたら、その頭を吹っ飛ばしてやる。俺は、俺を信じている。そして、俺の音楽を信じている。謙虚な俺なんぞクソ食らえだ。

イアン・デイビスの自叙伝の一部だ。彼らの音楽が完全無欠の音楽だとは思わないが、その過剰なまでの自信がうらやましかった。

デブデブ130にストーンフラワーの曲を録音してやったら、彼もストーンフラワーにはまってしまった。デブデブ130はストーンフラワーの二枚めのアルバムを探し始めた。一度与えられた任務は何があっても完遂するのがデブデブ130だったが、ストーンフラワーのセカンドアルバムはなかなか見つからなかった。名もないバンドの昔のレア盤が、そう簡単に見つかるわけではない。そんなある日、僕は歴史図書館に立ち寄った。僕が玄関に一步足を踏み入れたとたん、デブデブ130が駆け寄ってきた。

「見つけましたよ！」

「セカンドアルバムか？」

「ううん、そうじゃなくて、イアン・デイビスの自叙伝の翻訳者が、ストーンフラワーの大ファンなんだって」

「だから翻訳したんだろうよ。なんだよ、それだけか？」

「だからあ、翻訳した人が住んでるところがわかったんですよ。その人なら持つてるんじゃないかな、セカンドアルバム」

「そうか。なんで今まで思いつかなかったんだろう」

翻訳者のホン・ヘジョンの住まいはコリオ村にあった。デブデブ130にメモを見せられた瞬間、コリオ村の風景が目の前に甦った。人けのない道、丈の低い粗末な建物、旧式の車などが思い浮かんだ。でも、そこに人影はなかった。食事のできる所を探して歩き回っていたときも、道で人を見かけた記憶がない。ハンバーガーとコーラを頼んだ店に、その注文を聞いた店員がいたはずなのに、それが男だったのか女だったのかも思い出せない。僕にとって、コリオ村のイメージはゴーストシティだった。本物のコリオ村も、実はそれとさして変わりはなかったのだが、そのときの僕はまだ、それを知らなかった。

訳者あとがき

キム・ジュンヒョクは想像力と創造力に長けた作家だ。音楽や映画にも造詣が深く、イラストはプロ級。それらの多彩な要素がちりばめられたキム・ジュンヒョクワールドは、時におかしく、時に切なく心に響く。独特の軽やかな語り口、スピーディーなストーリー展開で一気に読ませるが、ああ面白かった、で申し訳ないにはならない。面白く読ませ、深く考えさせる作家。それがキム・ジュンヒョクだと思う。

キム・ジュンヒョクについては既に日本で紹介されているが、ここでまた簡単に紹介させていただくと、まず一九七一年生まれ。ウェブデザイナーや雑誌記者などの職を経て二〇〇〇年に月刊誌『文学と社会』に中編「ペンギンニュース」を発表して文壇デビュー。創作のほかにもインターネット文学放送番組の司会や新聞コラムなど多彩な活動を繰り広げるエンターティナーだ。その博識と好奇心を生かし、音楽や映画に関するエッセイ、ユーモラスな自作イラストがふんだんに散りばめられた『ボデイ・ムービング』なる体に関するエッセイなどを上梓している。金裕貞文学賞、李孝石文学賞など受賞経歴も多々あり。志向するところは、純文学にエンターテイメント性をテイストとして加えたユーモアのある作品だという。

キム・ジュンヒョクの処女長編である本作『ゾンビたち』は、そんな作家の本領が遺憾なく発揮さ

れた一冊だ。

本作は、「ゾンビ」をタイトルに持つてきていながら、実はゾンビの話ではない。ゾンビが人間を襲ってくるわけでもなく、人間が次々とゾンビに変わってパニック状態に陥ることもない。いわゆる「ゾンビもの」ではないのだ。この小説に出てくるゾンビはどことなく哀れでユーモラスな、人間が守ってあげるべき存在だ。彼らは、もとは殺人を犯したり麻薬に溺れたりといった反社会的な行為の末に命を落とした者たちで、軍によってゾンビにされて利用されている。それを知った主人公たちは、何とかして彼らを助け出そうとするのだ。そんな存在であるこの小説の中のゾンビは、恐怖や嫌悪の対象ではなく、人々の失われた記憶を思い起こさせる存在、記憶に留めておきたい人たちの象徴として描かれている。作家は、死者でもなく生きていくわけでもないゾンビを登場させたこの作品で、「死」というものについて、また死んだ者と生きている者の関係、さらには人と人とのつながりについて語っているのだ。

とはいえ、全体的に軽快なイメージの本作には、音楽やアートといったカルチャーの要素がふんだんに盛り込まれ、持ち前の想像力を駆使して作者がでっち上げた……失礼、創り上げた架空の事物は、実在するのかと思ってしまうほどそれらしい（私事だが、訳者は翻訳しながら何度か騙された。調べ物をした後で、やられた……と脱力して笑うのもまた楽しかった……と今では思う）。

またこの作品のさらなるポイント、それは主人公を取り巻く登場人物たちではないかと思う。甘えん坊でオタク気質たつぷりのデブデブ130にきつぷのいいイアン姐さん、とぼけたようにいて実は深みのあるケゲル。悪役の將軍さえもが悪い奴ならではの存在感と魅力を振りまいている。彼らチヤミングなキャラクターたちがスパイスとなり、この作品を盛り立てているのだ。またまた私事で

恐縮だが、訳者にとって、彼らは実在する親しい人たちのようで、翻訳している間、実に楽しかった（これは本音だ）。彼らは訳者の頭の中で実に生き生きとしゃべり、動き回ってくれたので、訳し終わったときは、もう彼らのセリフを、行動を、言葉に移すことはないのかと寂しかったほどだ。この愛すべきキャラクターたちが、読者の方々の心に長く残ることを願ってやまない。

キム・ジュンヒョクは、現在も文学にカルチャーにと相変わらずの活躍ぶりです。最近では韓国屈指の文学賞である「李箱文学賞」の候補にも名を連ねている。彼ならではの確かな歩み続けるキム・ジュンヒョクという作家と本作『ゾンビたち』を心の片隅に留めていただけたら、訳者としてこれ以上の喜びはない。

最後に、この作品に目を留めて下さり、日本の読者の方々に紹介できる機会を下さった図書出版論創社、編集に当たり細やかなお気遣いをいただいた論創社の松永裕衣子さん、翻訳支援をいただいた韓国文学翻訳院および担当の李善行さん、そして一緒に悩み、考え、訳者に翻訳を続ける力を与えてくれる韓国文学翻訳院翻訳アトリエの呉先生ならびにメンバーの皆さんに、心よりの感謝の気持ちをお伝えしたい。

† 著者

キム・ジュンヒョク（金重赫）

1971年に慶尚北道の金泉で生まれる。ウェブデザイナー、雑誌記者などを経て、2000年に中編「ベンギンニュース」で作家デビュー。創作以外にもインターネット文学放送番組の司会や新聞コラムなど多彩な活動を繰り広げるほか、イラストはプロ級、音楽や映画にも造詣が深いなど多芸多才。志向するところは純文学にエンターテインメント性をテイストとして加えたユーモアのある作品。短編集『楽器たちの図書館』（波田野節子・吉原育子訳、クオン）、『ベンギンニュース』、『偽の腕でする抱擁』、長編『ミスター・モノレール』、『あなたの影法師は月曜』、エッセイ『すべてが歌』などがある。東仁文学賞、金裕貞文学賞、若い作家賞、李孝石文学賞などを受賞している。

† 訳者

小西直子（こにし・なおこ）

日韓通訳・翻訳者。静岡県三島市生まれ。立教大学文学部卒業。韓国語を学ぶため1994年に渡韓し、延世大学韓国語学堂を経て高麗大学教育大学院日本語教育科を修了。その後、本格的に通訳・翻訳を学ぶため韓国外国語大学通訳翻訳大学院韓日科に進学、卒業（通訳翻訳学修士）。現在は韓国で通訳・翻訳業に従事する。特に韓国文学翻訳院の翻訳アカデミーで文学翻訳を学んで以来、その分野に力を入れて取り組んでいる。訳書に金学俊『独島研究』（共訳）がある。

ゾンビたち

2017年12月10日 初版第1刷印刷

2017年12月20日 初版第1刷発行

著者 キム・ジュンヒョク

訳者 小西 直子

発行者 森下 紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／白川公康

組版／フレックスアート

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1675-3 ©2017 Printed in Japan